

講演「過去の地震津波教訓～次世代に何をどう伝えるか？」

講師：林 能成 名古屋大学大学院環境学研究科助手

木村 玲欧 名古屋大学大学院環境学研究科助手

「過去の地震津波教訓～次世代に何をどう伝えるか？」と題して講演が行われました。

講演内容は、戦時中のためほとんど報道されなかった大地震（1944年東南海地震、1945年三河地震）のインタビュー調査から得られた知見・教訓を絵にし、防災教育、防災意識向上にも役立てようとするものとなっています。以下にその概要を紹介します。

1. なぜ東南海地震・三河地震を絵にするのか

災害状況を絵にすることにより、現実性をもって災害・防災のイメージにつなげることの有効性が紹介されました。

戦時中のため、ほとんど報道されなかった1944年（昭和19年）東南海地震、1945年（昭和20年）三河地震の当時の新聞記事の扱いが紹介されました。また、これらの地震について、その地震の特徴（各地の震度分布、死傷者数、家屋の被害、津波高さ）が述べられ、三重県の死者の多くは津波によるものとの説明が行われました。

災害エスノグラフィー（災害発生時の人々の対応や社会の動向について、インタビュー等を基に、被災者・災害対応者の視点から見た災害像を描いていく）手法により、被災体験を絵にする過程が詳細に紹介されました。

2. どのような被災体験をしたのか

三河地震の震源及び海岸に近い地区（形原町及び西浦村）で重点的に実施されたインタビューにより、絵にした当時の状況について説明がなされました。

当時、前震活動で警戒した避難行動としては、①仮設の小屋への非難、②地震で揺れたら「即、逃げ出す」ために1階で寝る、としたものが、多くのインタビューで体験談として得られました。なぜ「地震のとき外に逃げられる」と思っていたのかについては、37日前に発生した東南海地震の体験（海溝型地震でゆっくりと長時間揺れる）や当時の地震津波に対する注意は「戸外に避難すること、家屋が倒壊するまでに猶予があること」であったこと等が挙げられました。

津波被害にあった方のインタビューを基にした避難状況、崩れた家の下敷きになったおばあさんを助けようとした状況、家が全壊した状況の中どのように避難生活が行われたのか等、多くの絵を用いた被災体験が紹介されました。

3. どのように未来の備えにつなげるか

災害発生時に起きる「失見当」（通常よりも視野が狭くなっていて、より客観的に思考・判断することが難しい時期）、「安否確認」（自分にとって大切に思う人や事物が無事かどうかを確認する作業）、「救助・救出」のそれぞれについて、インタビューにより体験を基

にした絵を用いた説明がなされました。

防災の担い手は、自助（自分・家族）、共助（地域）、公助（行政・公共機関・公益事業体）からなることが説明され、最後に防災に王道はなく、個人・家族・地域の特徴によって、災害に弱いところが違うこと、画一的な防災対策では守れないこと、自分達の弱いところを知り、地域で起こりうる災害を知ることで、自分たちに必要な「いのち」、「くらし」を守る対策を考えることが指摘されました。